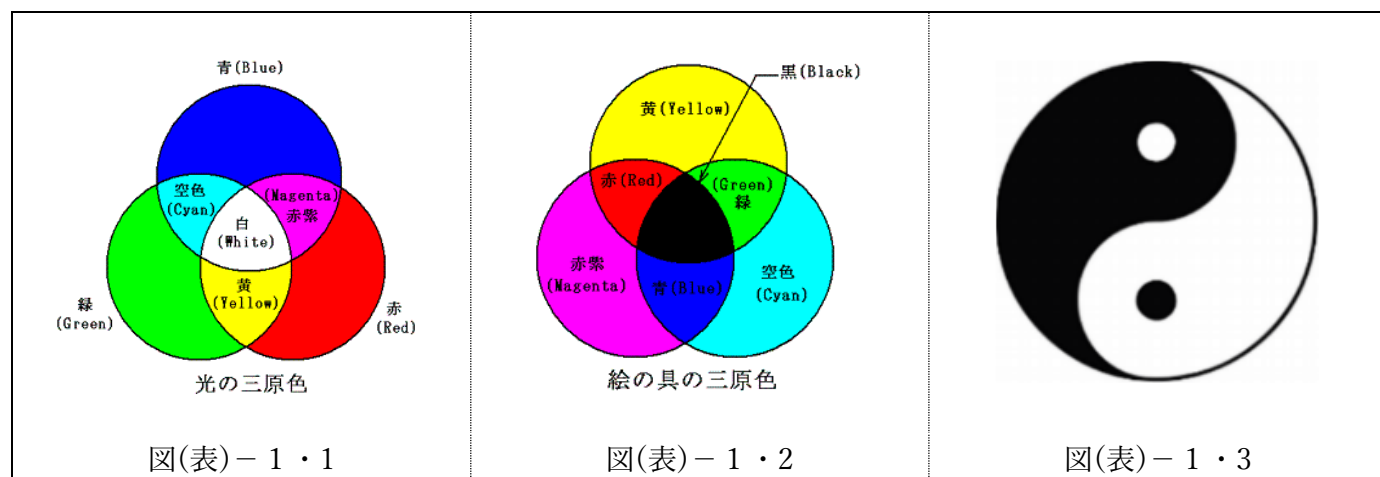


一般的に『色』と称するものは、光の色と、絵の具の色があって、同じ色と見えつつも性質が異なる。

図－ 1 ・ 2 (<http://fnorio.com/index.htm>) のとおり、**光は混ぜるほどに白色になり、色は混ぜるほどに黒色になる**。それぞれの三原色が中間色と交代する。いずれにしても、最終的には「一色一味」となる。良いも悪いも混ぜれば混ぜるほどに個相互の境界が無くなって行く、我的個性が薄まって行く世界となり、境界という障害が取り除かれて行く。逆に再現性の視点から見ると、**光（白色光）は再現出来るが、黒（色）は再現不可である**。なお、この宇宙で、白色光として実在するのは太陽光である。なお、白色光は科学的には透明で無いが、人間の目から見れば透明という表現で差し支えない。『**前**光』は可逆性を持ち、『**後**色』は不可逆性である。前者の光は、主の3原色が7色に変化するのだ、化けたのだ、融通無碍の世界観。そして正反合を連想した、三色の静態的個別状態「正」に対し、混ぜるという動態的『反』を作用させると、「合」のレベルにおいて新しく7色が生じた。新しいものを創造するという訓えを読み取る。後者の色は、偏頗・固定・堅物、杓子定規の世界観に符合する。

光は三原色以外を含めても白色光になる。理論上は7色以外の無彩色調を分光するが、人間の目の識別限界は7色ということ、能力を無視すれば無彩色調を再現する。

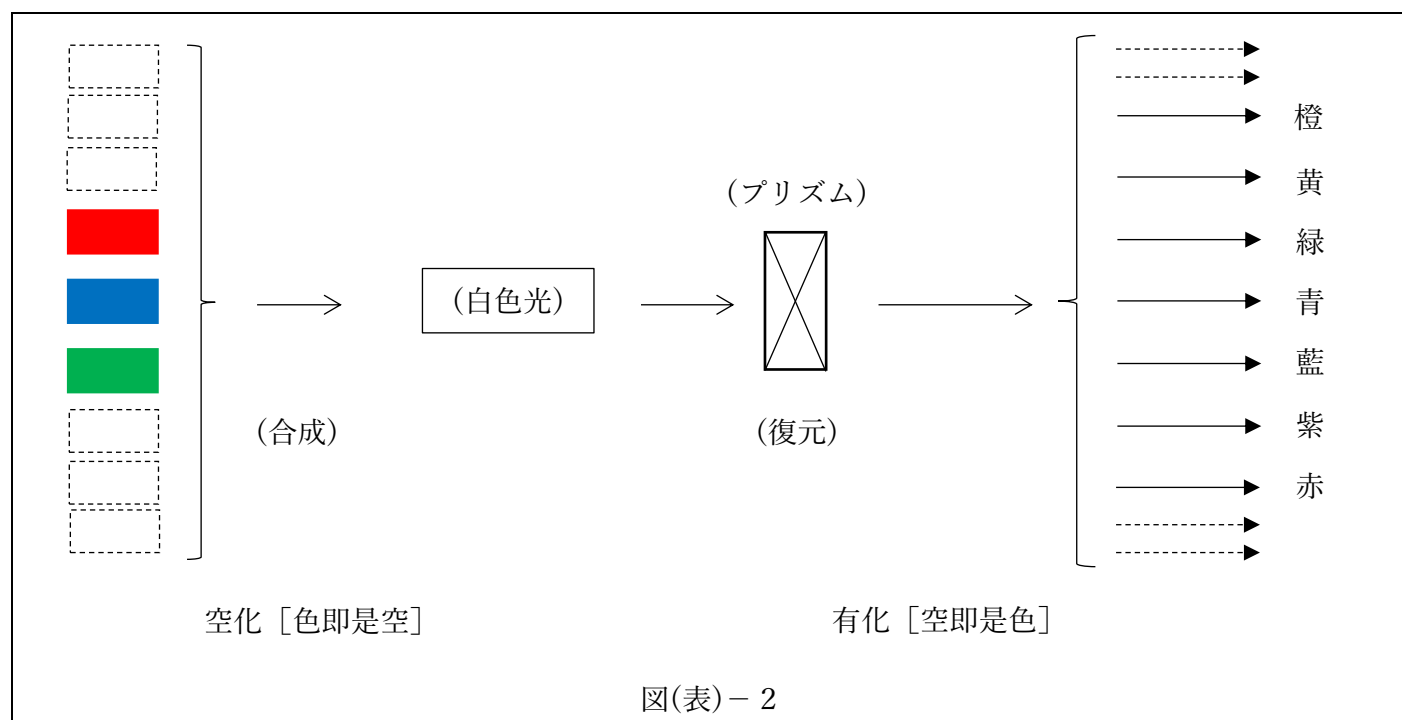


光はごちゃ混ぜするほどに白色化する——全体が純化・浄化の様相をたどる、きれいになって行く。しかし、色（絵の具）はごちゃ混ぜするほどに黒色化（汚れて行く）する、「色メガネ」とはまさにこのことを指す。肉眼に映る同じ色調・同じ色合いでも、光と絵の具では、混合の結果は正反対になる。この違いの理由について科学的に説明は割愛するが、光は、自然界（太陽）は天空の産物であり物理的に掴めない無体色、絵の具は人工物・地上の産物であり物理的に掴める有体色と表現出来る。

図(表)－ 2 の世界は環境条件に無関係に太陽光は7色の色元素を有している様相のことである。4回目四国歩きへんろにおいて「お日様の白き光の散らばれる 歩禪行場に七色の虹」と詠んだが、その意味合いは次のとおり。太陽は同じ強さ・同じ速さの光を四方八方に放つが、その太陽の光が空気中の水滴に当たって屈折や反射することで発生する現象である。水滴を媒介にしたということは、ある条件下で見えない光の色が7色に現象化したものである。その条件（水滴）が無くなれば虹は消えるのである。水滴が有体化の条件なのだが、無体化の条件でもあるのだ。つまり、水滴は周囲環境に有体化・無体化の力を行行使して影響を与えたというもののいつまでも常体化継続はしないということである。見方を変えれば、太陽そのものが7色に分割している訳では無いから7色の素地・種子（要素）を内包してということでもある。

光の性質をこのようにみる時、私は華嚴経でいう「理事無碍法界」から発展的に捉えた「事事無碍法界」に重なって来る。

人間は十人十色、百人百様です、意気投合として、価値観の共有と称して、様々なグル・ムレ・タマリ・何とか会を作る。「朱に交われれば赤くなる」と「類は友を呼ぶ」と云われるが、三原色に重ねれば、片や純白の「白」だが、片や真逆の「黒」である。結果の白と黒を除くと同じ色の関わりである。サラサラの光は混ぜれば混ぜるほど純粋な「白」に近付く、ドロドロの絵具は混ぜれば混ぜるほど純粋な「黒」に近付く。



✓サラサラ組は、光の加法混色のとおり、互いがポジティブに係るが故に明るい方へ導かれる。

✓ドロドロ組は、絵の具の減法混色のとおり、互いがネガティブに係るが故に暗い方へ導かれる。

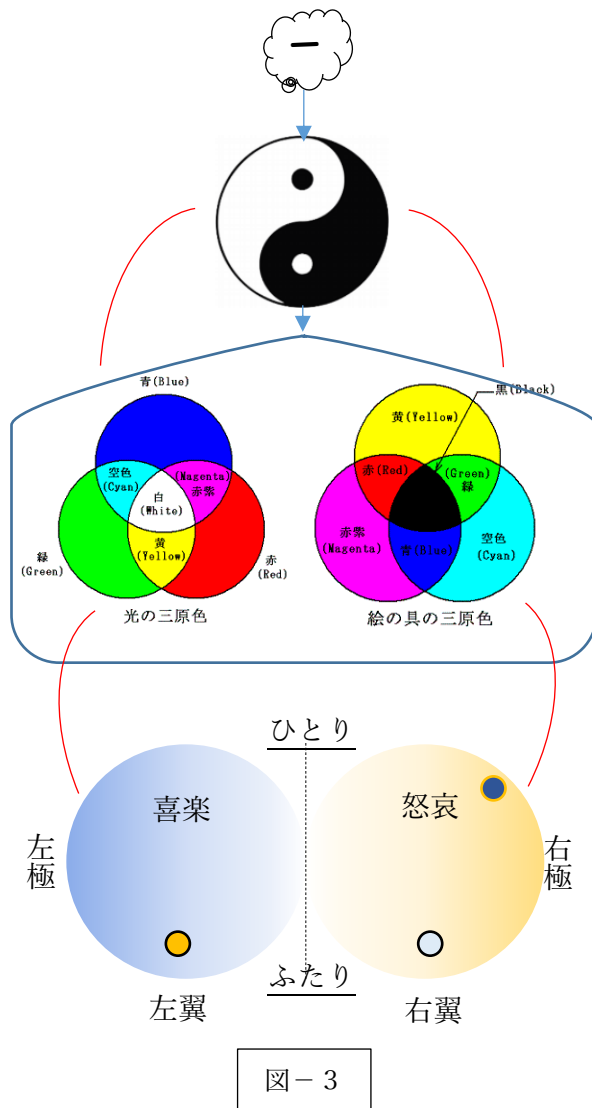
色の世界は人間の世界とシンクロする一面である。だから、このような自然原理に学び、日常生活において、黒っぽい世界の人間には近付かない、一見カラーを見せながら芯（内心）は黒を内蔵している危険分子だからである。

白と黒の対比とくれば、図(表)－**1・3**のとおり「陰陽原理」の世界との関連である、中国古典「老子、淮南子」等によると、「混沌の一から二（陰陽）を生じ、二は三（万物）を生ずる・・・」とある。三原色は万物の初源の象徴に重なる、さらに三原色を膨らませて「無限段階カラー・グラデーション球体」に拡張発展させ、これらを重ね、あるいは、組み合わせてイメージすると図(表)－**3**のとおり。

人間の個性を色合いの違いに仮託して見るが、人間の生命力は、深淵で複雑怪奇で無限段階の色合いを持ち合わせており、一刀両断で解剖出来るようなものではない。だから生命力の優劣を比較・計量することは出来ないのだ。そのせめぎ合いの格言に「あちらを立てればこちらが立たず」「痛しかゆし」「帯に短かし、たすきに長がし」などがある、何でもトレードオフ、これが面白い。

そこで世の識者は「偏るな、左右・白黒の調和・バランス」という美名を持ち出して誇るが、果たして、「調和」というあるべき姿に誘導し、現実化する具体方策は如何に？ 私は、世のもの・ことは差別界（相）と平等界（相）の相対が同居する“一つ”である、という認識を徹底することだと思っている。

さて、光の合成が仏教世界の「空化（無体化）」——個別相互境界線が薄まることと意味同等である、光



の復元が仏教世界の「有化（有体化）」——相互境界線が再明示することと意味同等である。光の性質に係る合成～復元過程は、般若心経の神髄「色不異空 空不異色 色即是空 空即是色」の教えと重なる。

○「色即是空」眼識の発揚～光の合成

眼前の「もの・こと」の意味・価値をまずはズダズタに叩き壊して空化する。意味分別の境界線が外れた、優劣序列のない可能性種子の海が見えて来る。分別知・差別界^{しゃべつ}を徹底否定すると無分別智・平等界に行き着く。

○「空即是色」眼識の発揚～光の復元

返す刀で、その可能性種子の眼識を以って、眼前のもの・ことをリサーチする。可能性種子が芽吹き、創造価値が自発する新しい「もの・こと」に有化される。眼前に戻って、既存の「もの・こと」は新しい分別知・差別界に更新される。

また、般若心経の神髄は「色不異空 空不異色 色即是空 空即是色」である。同御経を唱えない宗派の人達でさえも知っているだろう「色即是空 空即是色」の意味合いのこと。とりわけ「空」とは何かである。世間一般で言う“空っぽ、何もない状態、真空”では無いのである。維摩経「不二一如」における一如、華嚴経「法界縁起」の究極世界を表現

している「一」、そして最先端量子学における「ZPF」と

いう場が「空」なのである、個性・個別性が剥がれた執着から離脱した世界である。人間が認識する実態（色）は個別体の無限集合体と観るからには、個の存在性は無くなったとする概念である。

「色即是空と空即是色」世界観の同時往復（否定・肯定）を強く意識すれば、何事にも複眼的思考の同時照射が癖付く、習慣化するであろう。現象差別の裏に無差別を見る、本体平等の裏に差別（個性・長所）を見る眼力・眼識を修養すればこそ「もの・こと」の真相・心理が見えて来るという考え方である。

ところで、「白色光として実在するのは太陽光である」と前記したが、現実の太陽（太陽光）は直進性のために影を作る一面があるというのが、被照物体（受ける側）の性質に依る、100%光を透過する物であれば影は出来ない。例えば、心の汚れを洗いきれいにするほどに、純化するほどに太陽は裏まで透過・回折しその恩恵を齎してくれるが、心が汚れていれば障害物となって、光は充満せず、しかも透過せず真っ黒けの影を作り、その人間は無明となり自滅への道を辿ることになるであろう。人の組織・集合体においても同様の見方が出来る。時々持ち出す「人的ワースト5・マンキタゲ^{や き も ち ねい かん}佞奸根性」は排除すべきというのは、組織・集合体に内在する汚濁物・障害物となって、影を作り、つまり、全体の活力を削ぐ元凶になるからである。

(end)